リマ風の夢魔

作：ヨナッタン・X・ディアス・ガステジョ
訳：黒田達明

第1章　大学にて

I

誰もいない埃っぽい教室。やがて、あれやこれやの未熟な若者どもが入ってきて、暇に任せて歩き回ったり、勉強机に伏して眠ったりすることであろう。寒々しいコンクリート、歳月が表面を削ってすっかり粉だらけになったセメントの壁に、時計の音が仰々しく反響する。

教室のドアが床に引っかかりながら、ガタガタと震えて開く。ドアの背後に一人の大金持ちの青年。こんな教室には相応しくない、他の学生たちとは違う青年の登場である。ただ一点、怠け者であることには他の者たちとなんら変わりないのだが。背の高い白人で、スポーツマンタイプの体つき。金髪が青白い額に垂れていた。有名なイギリス人歌手の胸に描かれたポロシャツに、茶色い革ジャン。耳にはイヤホンが差し込まれ、お気に入りの金属的な叫び声を携帯プレイヤーで聴いている。

アルベルトは教室に足を踏み入れ、嫌悪感を露わにして、やる気の失せる部屋の様子を眺めた。まだ慣れていなかった。最前列の席へ行き、居心地の悪い腰掛けに押し込むために長い脚を縮めつつ、硬い背もたれに寄りかかる前に、持参の冷たい炭酸飲料を一口飲んだ。少しずつ大学近隣地域から学生たちが集まってきて、教室はスラムのような光景に変わっていった。彼らはよれよれのTシャツを着ていて、Tシャツには気取ったつもりの品のない言葉がプリントされていたが、それももう色褪せていた。アルベルトはこの哀れな景色に嫌気がさし、携帯プレイヤーで好きなバンドを聴くことに専念した。

――ふん、田舎者が――コカコーラの瓶を口に運ぶ前にアルベルトは呟いた。

そこへもう一人、学生がドアから入ってきた。フード付きの黒いセーターを着て、フードの下には切り傷のある褐色の顔。腕の下には黄色いノート数冊を抱えている。下顎をクイッと上げて合図し、アルベルトの右側に座った。

――やあ、ブロデル[訳注：ブラザーのスペイン語訛り]、何聴いてんの？――褐色の男は訊いた。重たい沈黙のバリアを破るために。

アルベルトは無視した。誰が話しかけてきたのか見るために振り向くことすらしなかった。腕を組んだまま、床を見て、教師が到着するのを待ち続けた。授業を受

けて、それから、こんな軽蔑すべき世界から隔離された、カスアリナス[訳注：スルコ区にある高級住宅地]にある華麗なる自分の世界へ帰っていくのだと思いながら。イヤホンをしたまま、ノートの最後のページを開いて、一人で三目並べ(〇×)を始めた。

――たぶん、オマエを知っているよ、ブロデル。ミゲル・フエンテスって奴とダチだろ？

――褐色の顔はひるむことなく第二の質問を発した。

――知らねえよ。ミゲル・フエンテスって奴なんかとダチじゃねえし。わかる？　オマエはオレと知り合いじゃない。オレはオマエのブラザーじゃない。オーケイ?!　もう話しかけてくんなよ、ボケ――アルベルトは携帯プレイヤーの音量を上げて、三目並べの私的競技を続けた。

――勝手にしろ、くそったれ――男はついにそう言い放ち、怒って席を立った。そして、ほかに誰か話し相手を求めて教室の奥へ行った。

アルベルトは罫を引いたページの上にボールペンを置いて考え始めた。あんな奴らのなかで、僕は一体なんでこんなところにいるのだろう。彼は輝くため、選ばれし人々のなかにいるために生まれたのだった。敗者に囲まれて生きるためじゃない。もっと価値ある存在なのだ。なのに、なんで、そんなところに？

答えは明白なようだ。彼は怠け者で無気力で役立たずなのだ。いや、まさか！本当は相当に賢い――もっとも、そうなろうとしたときだけの話だが――のだが、しばしば無精をして無為に過ごしてしまうだけなのだ。というのも、彼は名高い高校のーBコース(国際バカロレア資格を取得できる)で勉強をしてきており、数々の外国の大学に志願したのだから。とはいえ、どこにも合格できなかった。パリかニューヨークかシドニーに留学しようと考えていたけれど、ほかの敗者どもと一緒にリマに残れという判決が下ってしまったのだ。そこで、パシフィコ大学かリマ大学かカトリカ大学[訳注：ペルーの三大有名私立大学]を目指したのだが、またも、それらハイクラスの教育機関から、嫌な味の痰かなにかのようにぺっと吐き出されてしまった。それで、そう、勿論、彼の父は、とある並みクラスの大学の学長と懇意の仲なので、息子を入学させるようにと口をきくだけでよかった。

ハーバード大学を、オックスフォードを、プリンストンを、ヨークを、ケンブリッジを夢見ていた。結果、どうでもいい大学に入り、リマの貧民地区や周辺地区からやってきた連中と一緒に過ごしている。それでは、どうやって、彼はペルーの最も優れたイギリス系高校が課す国際バカロレア資格のための厳しい勉強に耐え抜いてこられたのだろう？　期末試験の結果が年間成績の五割以上を占めるわけだが、どうやって、すべての期末試験を合格したのだろう？　たぶん、彼の母が日々、学校内の活動に

入り込んで、教師たちに相当の影響力を及ぼしたのかもしれない。ありえることだ。そして、その結果、今や彼は箸にも棒にも掛からない大学に引っかかっているというわけだ。突然、恐怖に襲われた。自分は何一つ出来ないし、両親が背後にいなければ何者でもないということに気づいたからだ。アルベルトは泣きたかった。自分が出来損ないの人間であることに起因する、あれやこれやのくだらないことのすべてを嘆きたい気持ちに駆られた。

少しの間、左耳のイヤホンを外して、他の連中を見るために振り向いた。すると、連中がクラスのあちらこちらに散らばって、小さなグループを作っていることに気づいた。例の褐色の野郎は、数人の醜い浅黒い連中とモニョモニョ話していて、その浅黒い連中は彼の方をこっそりと見ながら、攻撃的な表現で陰口を叩いていた。誰か話し合える、見知った顔を人々のなかから探したが、どれも嫌な顔ばかりで、探すのは止めてしまった。

アルベルトが立ち上がって皆を見捨てて通りに散歩をしに出てしまおうとした瞬間、すなわち永遠の過ちを犯そうとした瞬間、一人のカワイイ女の子が戸口に姿を現し、痙攣するドアを通って入ってきた。中背で浅黒い肌、黒い巻き毛。感じの良い身なりで、その外見は、この場にいる他のすべての人々より明らかに優っていた。トルコ石色の色っぽい服を着ていて、見る限り、ある有名ブランドのもののようだったし、高そうだった。首には、小さなハート形の金の首飾り。無象無象から彼女を突出させるとても高いヒールを履いて、よろよろしながらやってきた。

――パティ！――来たばかりの彼女は素早く叫び、両腕を上げて、浅黒い女の子たちのグループに向かって走った――遅刻しちゃったかと思った。ねえ、先生はまだ来てないの？

アルベルトはあっけにとられて、その子から目が離せなくなった。どこかの良い高校から進学してきたに違いなかった。しかるべきところの女子高からに違いない、と彼は考えた。ああいう子がリマのブルジョア社会で知られていないこと、彼が彼女を知らないというのは変な話だ。実際には、イサベル、のちにその名を知ることになるのだが、は、リマック区[訳注：旧市街地付近の治安の悪い地域]に住んでいて、彼女の家はすえたアルコール臭のするバーや娼婦の立ち並ぶ一画からほんの数ブロックのところにあった。趣味がとても良かったし、魅力的だったが、アルベルトのような貴族ではなかった。

アルベルトは気分が良くなった。もう、孤独じゃない、とただちに思った。分かち合おう。この苦しみを。良い考えだ。もう、負け犬たちとの交友関係を強制されてはいなかった。彼を救済するため、地獄の門をくぐって現れた、あの天使さえいればい

い。授業の終わりを告げるチャイムが遠吠えのように聞こえて、彼の思考を中断した。

――結局、ウザい先公は来なかったぞ！――アルベルトは右手の拳で教室の机を叩いて叫んだ。

授業の後で、アルベルトは、イサベルと彼女の友達が大学の荒廃したカフェテリアで同じテーブルに向かって座って、お喋りをしているのを見つけた。友達は、規格外の大口で、揚げた豚肉のサンドウィッチを大急ぎで食べていた。二人とも同じ通りに住んでいて、幼なじみの隣人同士だった。

――今日、前の方にキザったらしい勘違い野郎が座ってたでしょう？――と、友達のパティは甲高い声で言った――アイツ、あたしたちに関心があるみたい。だって、結構、こっちを見てたもの。確かよ。まあ、あたしと話したくないヤツなんていないかも…あたしがラテンなナイスボディだっていうならね。でも、あんなヤツと話すほど落ちるつもりはないよ、あたしは。カルロス、って、あたしたちと一緒に勉強してた色黒クンのことだけど、彼が言ってたこと聞いた？　そう？　なんて言ったらいいか、とにかくアイツはサイアクよ。でしょ？　アイツはまるでケンカを売るみたいに言ってきたのよ。可哀想なカルロス君。あたしだったら殴ってたと思う。なんでカルロスが何もしなかったのか、わかんない。で、どう思うの、ヤツのこと？　わりといい感じ？　ただ髪を金髪に染めてるってだけで？　マジ勘弁してくださいよ。お願いですよ、もう。

――やあ、彼女たち――アルベルトが無邪気な笑顔を浮かべて、二人の会話を遮った。

パティは無視して、サンドウィッチに最後の大きな一噛みをして、挨拶もなしに席を立った。連れも当然、自分に従うものと思った。腹立たしいにもほどがあった。例の鼻につく白人がやってきて、彼女たちの親密な会話を遮ってきたのだ。だが、もっと不愉快なことには、イサベルを振り返ってみたら、彼女が自分に付いてこないどころか、その男の前に座ったままで、楽しそうに話しているではないか。こんなこと、絶対に許さないとパティは誓った。どうやら、イサベルは人種差別主義者のスポーツマン体型にボーッとなっているらしいと気づいた。さらにもっと不愉快なことには、アルベルトは自分ではなく、イサベルを探しに来たのだということがわかった。そして、もっともっと最悪なことには、自分が怒って去っていくことで、イサベルにいとも簡単にそいつを自分のものにできる状況を与えてしまうのだった。彼女の“ラテンなナイスボディ”が

ふやけた体のように感じられて、初めて惨めな気分に陥った。

――ごめんなさいね。あたしの友達、あなたとあまり気が合わないみたい――イサベルは青年の前で言い訳をした――たぶん彼女は、あなたがある子に言ったことに気分を害しているのよ。ほら、今朝、あなたのそばに座った色黒クンよ。ごめんなさい。名前は？　あたしはイサベル。

――僕はアルベルト――青年はそう言って微笑んだ――そいつのことなら覚えているよ。知り合いかい？　さあね。気分悪かったし、ちょっとウザかったから、そいつが迷惑だった。ていうか、ヘイ、いいじゃん。なんで？　君まで僕がウザいなんて言わないよね？

――ううん、ぜんぜん。あたしは誰にもムカついてないわよ。それに、そんなのあたしにはどうでもいいこと。だって、その子とべつに知り合いじゃないし。

――どこの学校の出身？　君のこと、なんかちょっと知っていると思うんだけど。どこかで会ったことあるはず。知り合いだよね、たぶん。カスアリナス辺りに住んでる？

イサベルはすぐに察知した。もし、自分が経済的に低いレベルの学校の出身であることをつまびらかにしたら、アルベルトは二度と自分と話す気にならないであろう。おそらく、人生で二度と会うことすらないであろう。彼女にとっては、アルベルトは美男子に見えたし、これっきりにはしたくなかった。どこかの良い学校の出身で、しかも、きっと大金持ちの一族の息子のように見受けられた。自分が興味を持たれたからというわけではないが、こういう男の子は毎日誰彼となく女の子に声を掛けているタイプではない。

イサベルはとっくに気が付いていたのだった。彼が自分をちらちら見ていたこと、自分に関心があることに。しかも彼は上品に見える。けれど、彼の自分に対する好感を維持したいと思ったら、自分の住んでいる地域を知らせて、怖がらせたりするわけにはいかなかった。彼女の父は何度も娘に言っていた。恋愛関係をもちたいと思うような男を見つけるなら、おまえと同じレベルか、もっといいのは、それ以上の地位の男であるべきだ。そうすれば、家族の人種を改善できるし、子どもたちや孫たちが俺たちよりもっと美男美女になるからだ。

――今はこの辺りに住んでいるんだけど、だって大学に近いし、すっごい遠くから通うほどあたし体力ないし。しばらくは、小さいけれど、すっごく素敵な貸別荘に居るのよ。だからサンイシドロ[訳者注：リマ中心部の高級住宅地のひとつ]の家とか、ぜんぜん羨ましいとは思わない。もうすぐプラニシエ[訳注：郊外の最高級住宅地]に引っ越すの。ママがそこに大きな家を買うところなの。今までの家はもっとずっと遠

いのよ。それに、そこには一度、泥棒に入られちゃったから、怖くなっちゃって。というわけで、ちょっとの間この辺に住むことにしたってワケだけど、ま、よくわかんない。ママが決めることだからね――イサベルはアルベルトが信じてくれることを無邪気に期待して嘘をついた――。話を変えて悪いんだけど、訊いてもいい？　あなたのような、いいところの高校を出た人がこんなしょうもない大学で何しているの？　わかんないわ。いいところを出た人はみんな、留学するものだって思ってた。もちろん、あたし以外のってことだけど。だって、あたしはちょっと個人的な事情があるからさ。それか、リマに残る人なら、もっとレベルの高い大学にいくことも簡単なんじゃない、よくわかんないけど。ここが悪いって言いたいわけじゃないんだけど、わかんないけど、もっといいところがあるでしょ？

――話せば長いんだ。本当のところ、僕は勉強とか、そういうことに関してはクズなんだ。僕が関心のあるのは音楽で、ギターやピアノを弾くことなんだ。行きたくなったらジムに行く、サウナでくつろぐ、ビーチで友達とサーフィンをする、そういうことなんだ。でも、勉強はだめなんだ。勉強するとなると、そのために一杯頑張らないといけないだろ、でも、僕にはそんな時間はない。だって、僕の音楽に集中しなきゃいけない、っていうわけさ。けど、へイ、いいじゃん。高校でだって一番出来たってワケじゃなくて、ギリギリだった。だから、大学の勉強はなおさら難しいってことだし、ほかのどこの大学にも入れなかったんだ。そんなわけで、僕はここにいる。でも、スペインに留学したいと考えているんだ。あっちのほうが米国より気楽だっていう話だぜ。米国人はこういうことはうるさいからな、ま、知らないけど、そうなんだろうさ。とにかく今のところ、僕はここに居て、何かしているってワケさ。おふくろが勉強を止めるのはだめだっていうからさ。で、君は？　なんでこんな大学にいるの？　君まで僕みたいなクズだなんてことないよね？――アルベルトは笑っていった。

――まあ、そんなものよ。まだどこで勉強しようか、探している最中。あなたと同じよ。さあ、わかってくれるかしら――素早く話題を変えつつ、ウソツキな女の子の悲しげな笑顔で嘘を隠した。

本当のところは、イサベルはペルー北部の慎ましい家族の娘なのだ。両親はランバイケ県の出身で、母は一五歳の頃、その地方のミスコンの女王で、父はチクラヨ[訳注：ライバイケ県の県都]の雌どもの憧れの的だった。二人は、大騒ぎの結婚式の後、一人前になるために首都にやってきた。当初から社会経済的中流階級に属していたが、二年前、彼女の父、ロベルト氏の死後、状況は決定的に悪化した。ずる賢い酔っぱらいたちのたむろする野蛮な町に、五人の無防備な女たちが残されたのだ。唯一、有名私立大学に進学して勉強を終えることができたのは、長女のみで、残りの

娘たちは皆、無能な教育機関を宿命付けられることになった。次はイサベルの番だったが、資金が不足したため、取るに足らない場所で彼女の知性を台無しにすることを余儀なくされたのだった。

二人の若者は何時間にも渡って語り合い続け、家に帰ることなど忘れた。二人は次の機会に何か一緒にしようと決めた。そう、こんな友情はそう簡単に見つかるものではない。話題は数々のほほえみのあいだで、いつまでも尽きることはなさそうだった。すぐに、金曜日の授業の後で一緒にどこかへ食べに行こうと約束した。日が経つにつれ、イサベルの無邪気な嘘はどんどん誤魔化すのが難しくなっていった。イサベルはいつも家で過ごしているような女の子だったから、嘘をつくのがあまり上手ではなかった。そのつもりはないのに、何度も自分の嘘を気づかずに自らバラしてしまった。

金曜日はすぐにやってきた。不安な気持ちになりながらもイサベルはその日を待ちこがれていた。その日の最後の授業が終わると、アルベルトは彼女に、ジョッキープラザ[訳者注：リマの巨大な高級ショッピングモール]へ何か食べに行こうと誘った。踊りに行くにはまだ時刻が早かったし、映画を見に行くにしても早すぎた。二人はさっそく、大学の駐車場で彼らを待っていたアルベルトのコンバーチブルで冒険に出かけた。

おぞましい現実はみるみるうちに二人から遠ざかっていった。二人にそれぞれのやり方で意地悪を仕掛け、同時に二人を結びつけもしている嫌な現実から逃げ出したのだ。ハビエルプラド大通りを走り抜けていくと、さわやかな風が二人の顔を冷やし、燃えるような太陽が興奮した二人の体を焼いた。アルベルトは英語の歌の音量を上げ、サングラスを掛けた。イサベルは両腕をバカみたいに挙げて喜びを表現した。風が彼女の波打つ黒髪を弄んで、新鮮な空気の中で舞わせていた。

ショッピングモールに着くと、二人はアメリカ風レストランに入ることに決めた。テーブル席は埋まっていたのでカウンター席に座った。カウンターは紅白の縁取りの付いた透明な箱で飾られていた。壁には、八〇年代のアメリカのアーティストや歌手、セレブリティたちの写真が掛かっていて、目を引いた。彼女は国産のカクテルを、アルベルトは輸入物のカクテルを注文した。二人でバッファロー・ウイングにフライドポテトを添えた皿(メニューではおかしな名前が付けられていた)を分け合った。

――お食事に招待してくれてどうもありがとう。全部とっても美味しかったし、この場所もすごく気に入ったわ。とってもレトロじゃない？　はっきりした色と古い写真で飾ったレストランがとても好きなの。なんでかわからないけれど。あなたはどう思う？

――もちろんさ。とても楽しくて好きさ。ここには来たことなかった？　信じられ

ないな、とっても有名な店だぜ。高校時代の友だちと、機会があればいつでも来てたんだ。まあ、すっごい油っこいメシなんだけど、いい感じだよ、美味しいよ。よく大勢のグループで来てたんだけど、カクテルを注文するために大人の振りをしてたんだ。ところがあるとき、メンバーに見た目いかにもガキな女の子が一人いて、そのせいでバレて捕まっちゃったんだ。その子は、みんなを面白がらせようと思って、立ち上がって、踊ろうとしたんだな。それで見つかっちゃったってワケ。でも、僕らに接客してくれた店員はとってもいい子だったんだ。なんにも言わなかったね。ただ大人のように振る舞ってください、と僕らに頼んだだけだった。それで、彼女が上司に絞られたりしないよう、もうそれ以上アルコールを飲むのは止めたんだ。実際、僕らにとてもよくしてくれたんだよ。何の問題も起こらずに過ごせたんだから。だから、みんなでかなりたっぷりチップをあげたんだ。ほとんど百ソル[訳注：一ソル＝三五～四〇円]近かったな。僕はそんなにたくさんあげたことなんてないよ。普段は一ソル、多くてもニソルだ。最近は友達とつるむことは少なくなったよ。奴らとはずいぶん楽しい時間を過ごしてきたけど、今は違う大学に行っているから、遊ぶ約束もしにくくなった。それであんまり会わなくなってしまったっていうわけ。大学でも、メンドクサイたくさんの数字やらなんやらで、もうツラくなってきた。会計学が自分に合っているのか、わかんないよ。僕は数字をいじるためじゃなくて、音楽をやるために生まれてきたんだからね。いつも半分退屈しているよ。君の方はどんな感じ？　会計学は好き？　なんでこんな専門を選ぶことにしたの？　君は法律の方が向いているように見えるけれど？

――わかんないわ。たぶん、いつも父と同じがいいと思っているからだと思う――途端、こんな個人的な感情を吐露してしまったことを後悔した。取り返しの付かない失敗だった。彼女は苛立った。悲痛な記憶が心の底から戻ってきてしまった。残酷にも、イサベルはいまだに辛い記憶に取り憑かれていたのだ。傷口はまだ縫い合わされていなかった。彼女の過ちのせいで、傷口からまた血が流れ始めてしまった。いつものことながら、崇拝する父の死という悲痛な思い出がひょっこりとよみがえって、心を突き刺すのを感じた。こんなふうに、彼女自身の思考や言葉が自分を裏切って記憶を呼び戻させてしまい、自分の最も脆い部分が傷だらけになってしまうことがよくあった。

声を詰まらせて、それ以上、話せなかった。短く鋭い絶望的な音だけ発して、息の出ないため息をついて、コップのものを飲んだ。でも、何も食べなかった。ますます気弱になって、泣き出してしまわないように、テーブルの縁をしっかりと掴んだ。涙が流れてしまわないように集中した。言ってしまったら酷いことになって、惨めになる

ことがわかっていながら、会話を父のことと結びつけてしまった自分を責めた。自分が辛くなってしまうような質問をしたアルベルトが憎かった。

――君のお父さんは会計士なの？

――違う。そう、だったの。死んで何年にもなる――吐き出せるわずかな息を使って説明した。そして、勇気を奮い起こし、この話を最後まで泣かずに終わらせる決心をした――寝ている間に心臓発作で死んだの――少し落ちついてきて、言い添えた。けれど、辛い気持ちを内に秘めておくことはできなかった。涙が溢れて、声が震えてしまった。イサベルがうつむくと、大きな涙が彼女の柔らかな頬を静かに流れていった。それから上を向いて、アルベルトに泣いていることを気づかれないようにした。けれど、たぶん彼は見てしまった。

――泣いているの？　悪いこと言っちゃった？　ごめん、泣かせるつもりはなかったんだ――アルベルトは慌てた。素早く手を挙げて、忙しそうにしているウェイターたちの一人に視線を送って、会計をするようにジェスチャーで頼んだ。

――何でもないわ。とにかく、もう過ぎたこと。いろいろありがとう――イサベルは席を立って、急いでレストランを出ていった。先ほど入ってきた入口を目指して階段を昇った。ほとんど走るようにして、乗り合いバスを待つ人々でごったがえしている“非公式なバス停”を目指した。

アルベルトは紙幣を一枚テーブルに置いて、恥じ入って去っていった娘の後を大急ぎで追いかけた。そして、“非公式バス停”で彼女を見つけた。家に帰ろうとするメイドたちの一団の隣に立っていた。頭の上で両手を振りながら、彼女の名前を呼んだが、イサベルは無視した。黒髪を三つ編みにした皺だらけの優しい女性が、彼女に呼ばれていることを教えてあげた。イサベルは女性に微笑み、それからアルベルトの方を振り向いた。彼は遠くから彼女を見つめながら、人混みの中へ分け入ろうとしていた。彼女はため息をつき、げんこつで涙を拭いて、それから、腕組みをして、彼がやってくるのを待った。

――家まで送るよ。

二人は駐車場に戻った。イサベルが彼の申し出を受け入れたのは、バス代を払うお金すら持っていなかったからだ。今朝、財布を持たずに、ただ家と大学を往復するのに必要なお金だけもって出かけたのだった。だから、スルコ区にあるジョッキープラザからリマック区にある彼女の家までバスを利用するには持ち金が足りなかった。駐車場代を払って、二人は出発した。アルベルトはカーオーディオでいつものメタルロックを掛けたかったが、今は適切ではなかった。もし掛けたら、気まずくすらなるであろう。イサベルは彼女の右側を飛ぶように去っていく家々や木々を見ていた。道

すがらずっと、アルベルトのほうを向くことはなかった。掌に汗をかきながら、ただただ早く家に帰りたかった。なんということだろう、彼女の家。今や彼を彼女の家まで案内しなくてならないのだ。

大学に忘れ物をしたと言い訳して、大学で降ろしてもらうように頼めるんじゃないかしら。だめ、そんなの信じてもらえない。もう、ご迷惑だから、この辺で降ろしてと頼んでみようか。これもだめね。アルベルトは私を家に送るまで止まりっこない。最初に見つけた素敵な家に住んでいる振りをして、ごまかせないかしら。だけど、もしバレちゃったら、きっと恥ずかしくて耐えられないと思う。というわけで、彼女は自身の黒い出自を明らかにせざるを得ないと悟った。車が荒々しいリマック区へ行き先を定める前に、予想だにしなかった知らせに驚くあまり、ブレーキが二度踏まれた。アルベルトは運転しながら、意気消沈させられるその地区が政治的プラカードや下品な落書きで覆われている様子を観察した。

――ここで降ろして。あなたが何を考えているか、わかる。あたしには恥じる理由は何もない――ハンドバックを脇に寄せ、もう一方の手で車のドアを開けながら、イサベルは言った。

――だめだよ！　いいって。心配するな。僕は誓って気にしていないから。なんで気にしなくっちゃいけないんだ？　ちょっとの間、この辺りに住んでいるって君は言ってたよね。だから、いいじゃないか。

――ウソなの！　ウソ！　ここで生まれて、ずっと住んでるの！――車を降りながら、ヤケになって恥じ入ってイサベルは叫んだ。

――だけど、僕は気にしないよ。本当だ。僕らは友達だよね？　僕が怒らなきゃいけない理由なんて何もないよ。僕に嘘をついたのは、この地区のことを話すのが恥ずかしかったからに違いない。それはふつうのことだよ。僕が君だったら、やっぱり同じことをしたよ――アルベルトは不機嫌になっていないことを見せようとして微笑んだ――僕は君が君だから好きなんだ。君は楽しいし、感じがいいし。君という人が好きなんだ、住んでいる地区は関係ない。正直言って、君のことをよく知った後では、どういう社会階級の出身かなんてどうでもよくなった。以前は確かに気になったよ。レベルの低い奴らと一緒に居るのが嫌になってた。僕らが知り合う月曜日までは、そうだった。でも、君が僕を変えたんだ。まだそんなに時間が経っていないことはわかっている。でも、今、君はそのことを教えてくれた。心から言う。僕は気にしない。本当だ。見てくれ。僕は気にしない。こんなふうに僕らの友情を終わりにしたくない、こんなばかげたことで。これからも友達だよね？

冷たい厳格な沈黙があった。長大な数分間、絶望した心は何も言えなかった。落

ちついて考えた後、イサベルは車に戻った、今一度恥ずかしい思いをしながら。今度は自尊心のままに行動したりはしなかったし、車から降りて逃げたりはしなかった。幸せなアルベルトは彼女の家庭を目指した。彼の変化を明らかにするものがあった。というのも、赤信号で停止している時、痩せこけて飢えた青年が、その日を生き延びるための一助となる慎ましいチップの対価として複雑なとんぼ返りをやってみせると、無視する代わりに、関心を示し、同情して、今晩の食事代として紙幣を渡したのだった。

――あした電話するから――家に入る前、気分が良くなって、イサベルは最後にそう言った。

――オーケイ、じゃあね――お別れにアルベルトもそう言った。

土曜日の午後、二人は出かける約束をし、サラサール記念公園の下にあるラルコマール[訳注：海際の高級ショッピングモール]へ行くことに決めた。とある米国チェーンのカフェでキャラメル味のコーヒーを飲み、その後、映画館でコメディを見た。夜は、アルベルトは彼女をラ・チーナの家でのパーティーに招待した。ラ・チーナは高校時代の友人でカスアリナスの彼の家の近くに住んでいた。そこでウォッカのオレンジジュース割りを飲んで、お喋りをして過ごした。やがて深夜になったので、イサベルはアルベルトの家で寝ることになった。アルベルトの家では、くたくたになるまで、トランプでネルビオーソというゲームをして過ごした。こうして二人は楽しい友達関係を築いた。週末はほぼ二人の聖域となった。二人であのコンバーチブルに乗って、リマのキザな場所ならどこへでも出かけていった。二人はブルジョアの友人と一緒によく出かけた。イサベルはほとんど地元では過ごさなかった。パティをフリアンヌに、カルロスをコリンに入れ替えて、彼らとはもう二度と話すことはなかった。時々、パティとは乗り合いバスで偶然一緒になったときや、色彩豊かな巨大なキーホルダーのついた鍵で彼女の家の鉄柵を開けたりしているときに、彼女と視線が絡み合った。けれど、二人が話し合うことはなかった。二度と話し合うことはなかったのだ。

ほどなくイサベルは高価な贈り物を一杯受け取った。かつては、いつの日にか自分で所有できるなどと考えてもみなかったような高額な品々だ。香水、イヤリング、洋服、時計、サングラス、コート、帽子、水着、ハンドバッグ、サンダル、靴、引き出しに仕舞っておくような小物類、ベルギー製チョコレート、ブレスレット、チェーン、指輪、首飾り。

――イサ、ハニー、なんだって二つの首飾りを一緒に使っているの？　おかしいんじゃない？　明らかに似合わないよ。お願いだから、その二つを一緒に付けないでくれ。さあ、金の方を外すよ。いいかい、みっともないから。みっ・と・も・な・い。

――わかんないわ。それ、外したことないの。一度も外したことないのよ。あたしにとってなにか大切なものなの――イサベルは説明した。

実際には、それは使用している唯一の首飾りだった。というのは、その中には愛する父の写真が入っていて、彼女の不完全なハートに常にぴったりと寄り添っていたからだ。けれど、イサベルは少しの間、考えた。それは単なる首飾りに過ぎない。外したところでどうということない。大事なのは中にあるもの。そうよね？

――そうね、あなたの言う通りね。じゃあ、外すわ――金のハートの首飾りを外して、ハンドバックの中に放り込んだ。まるで、噛み終わってトイレットペーパーに包んだガムのように。さあ、イサベルは、もういつでも踊れるし、夏期限定のディスコで夜明けを迎える準備もできている。ディスコはブルーバード・デ・アシア[訳注：リマ中心部から100kmほど南にある海岸のリゾート施設。夏期のみ営業している]のディスコ。彼女の素晴らしいアルベルト、もう離れられないアルベルトがいつも一緒に過ごすリマの貴族たちのお気に入りの場所だ。